

Question /

近年、地方創生の中で、**デザインやアートの力が求められる**ケースが増えている。
一体なぜか？

今知っておきたい
新しい学び

Story by
武蔵野美術大学

地方の未来を描いた美大生 社会課題を解決する 新たなデザインの力

行政のお題を根本から覆し
「町と繋がる喜び」を発見

人口減少、高齢化、地方経済の縮小…。全国の地方が課題を抱えるなか、さまざまな自治体が積極的に大学と連携し、学生と共に地域活性化の取組を行っている。森林資源の豊かな北海道森町も、その一つだ。地域の未来や再生の方法を模索して、2021年に武蔵野美術大学との連携プロジェクトを開始した。ところが、この

「北海道森町プロジェクト」は、当初の予想をはるかに超える展開になったと、担当教員であるクリイティブイノベーション学科学科教授、若杉浩一氏は語る。

学生たちは1カ月間現地に滞在し、地域の産業や暮らしについて調査した。当初は行政からのお題に沿っていた学生たちだが、3週目には若杉氏いわく「覚醒」。「大人たちは、農産物を使った特産品や、観光地化といった、経済資源のデザイン」を想像していた。しかし学生たちは、森

町の営みに触れたことで、ここでの「暮らし」そのものが資産だと気づいたのです。そして、付け焼き刃な産業開発アイデアではない提案を考え始めた（若杉氏）。

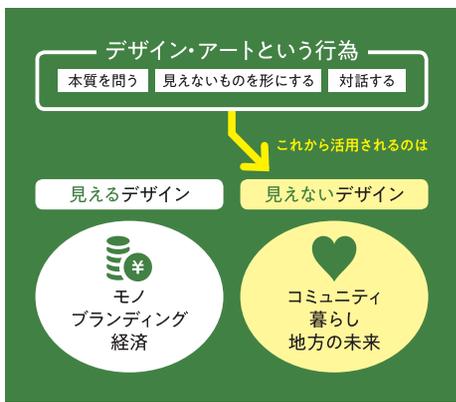
地方に縁のない東京の学生が、森町の中に見つけた、新たな価値。それは「この地域の暮らしに関われること、何かを与えること自体が喜び。消費で繋がったとしても本質的な幸せは得られない」ことだった。学生によるプレゼンテーションを聞いた行政の担当者たちは、とても喜んでという。「自分たちの町がもっていた宝物に気づき、心が溶ける、誇りが取り戻されるような瞬間だったと思う」と若杉氏は語る。新しい「町と人との繋がり方」を創造しようと、研究を引き続き行う学生もいるそうだ。

予定調和のなかで終わってしまう産官学プロジェクトも多い。なぜ森町を訪れた学生たちは、想定を超えて、町の人たちの意識変革をもたらすまでに至ったのか。「それはデザインやアートが、本質を問い続ける行為だから」と話す若杉氏。デザインやアートによる表現とは、絵を描いたりものを作ったりすることだけではない。「対話によって自己と他者の本質を考えること。概念を言葉にすることや、新たな活動にすることも表現なのです」（若杉氏）。

そして、その力が今、既存の考え方では到底解決できない社会

課題を前にして求められている。経済をつくる活動は行きつき、環境を脅かすまでになった。従来の産業の形に縛られずに、地方に眠っている本質的な価値を見つけて、町の人と一緒に新たな生き方や働き方を生み出せる人材を——。こうした社会の要請を受けて、具体的な課題を前に「人間に寄与するデザイン」を実践する方法を教えるのが、2019年、

武蔵野美術大学 造形構想学部に新設されたクリエイティブイノベーション学科学科である。基礎課程（1・2年次）でデザインやアートのものの見方を身につけ、専門課程（3・4年次）では実社会のリアルな問題の中で応用してみることで、実践力を習得する。「人の意識が変わると未来が変わる。意識を変えていくのもデザインの大きな役割」と若杉氏。美術大学ならではの教育によって、社会課題解決の新たな担い手の育成が期待される。



新増設

新入試

高大連携

グローバル

キャリア教育

新しい学び

研究力

地域連携

Information

武蔵野美術大学

Data

鷹の台キャンパス
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
Tel 042-342-6995 (入学センター)
Url <https://www.musabi.ac.jp/>

Event

オープンキャンパス
【学校開催】7/16(土)・17(日)
【オンライン開催】8/27(土)・28(日)